

第四十節の隠された歴史 - 第三号

日曜法と預言の旅路：愛国者法から最後の試練へ

Jeff Pippenger

2024-09-22

神の律法に背いて教皇制を強制する布告によって、わが国は義から完全に離反する。プロテスタント主義が深い溝を越えて手を差し伸べローマの勢力の手を取るとき、さらに深淵を越えて手を伸ばし心靈主義と手を結ぶとき、この三者連合の影響のもとで、わが国はプロテスタントかつ共和主義の政府としての憲法のあらゆる原則をことごとく退け、教皇制の偽りと惑わしを流布するための手立てを講じるようになる。そのとき私たちは、サタンの驚くべき働きが現れる時が来たこと、そして終わりが近いことを知るであろう。

ローマ軍の接近が弟子たちにとってエルサレムの差し迫った滅亡のしるしであったように、この背教もまた、神の忍耐の限界が来たこと、わが国民の不義の器が満ちたこと、そして憐れみの天使がいままきに飛び去り、二度と戻らぬであろうことを、私たちに告げるしるしとなりうる。やがて神の民は、預言者たちが「ヤコブの苦難の時」と描写した、あの患難と苦悩の情景のただ中に投げ込まれるであろう。忠実で、迫害に苦しむ者たちの叫びが天に昇る。また、アベルの血が地から叫んだように、殉教者たちの墓所から、海の墳墓から、山の洞窟から、修道院の地下墓所からも、神に向かって叫ぶ声がある。「いつまでですか、聖にして真実なる主よ。地に住む者らに対して、私たちの血のためにさばきを行い、復讐してくださらないのですか。」

主はみわざを行っておられる。天は一斉に動いている。全地のさばき主がまもなく立ち上がり、侮られてきたご自身の權威の正当性を示される。神の戒めを守り、その律法を敬い、獣またはその像の刻印を拒む者たちには、救いの印が押される。

神は終わりの日に起こることを明らかにされた。主の民が反対と憤怒の嵐に立ち向かう備えをするためである。前もって自分たちの前にある出来事について警告を受けた者たちは、来たる嵐を静かに待ち構え、主が悩みの日に忠実な者たちを守ってくださると自らを慰めて座してはならない。私たちは主を待つ者のものであるべきであり、怠惰な期待のうちにはではなく、揺るぎない信仰をもって真剣に働くべきである。今は、些末な事柄に心を奪われている時ではない。人々が眠っている間に、サタンは主の民が慈悲も正義も受けられないように、活発に事を整えている。日曜運動は今や暗闇の中で進展している。指導者たちは真の争点を隠しており、その運動に加わる多くの者たちも、底流がどこへ向かっているのか自分では見ていない。その主張は穏やかで一見キリスト教的であるが、いざ語る時には竜の霊をあらわにするだろう。迫る危険を避けるために、私たちの力の及ぶ限りのすべてを尽くすのは私たちの義務である。人々の前で自分たちを正しい光のもとに置くことによって偏見を解くよう努めるべきである。彼らの前に真の争点を示し、こうして良心の自由を制限する方策に対して最も効果的に抗議すべきである。私たちは聖書を調べ、自分の信仰の理由を語る事ができる者でなければならない。預言者は言う、「悪しき者は悪しきことを行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。しかし、賢い者は悟る」。『証言』第5巻、451、45

「『日曜運動』が『語る時、それは竜の霊を明らかにする』。四つの段落は、日曜法の時にアメリカ合衆国が『義との結びつきを完全に断つ』ことを示している。日曜法の時には『サタンの驚くべき働きの時が来た』。日曜法の時に三重の同盟が成就する。日曜法の時、アメリカ合衆国は『プロテスタント共和政としてのその憲法のあらゆる原則をことごとく放棄し』、また『教皇制の虚偽と惑わしを広めるための手立てを整える』。その日曜法は、『神の忍耐の限界に達し、わが国の不義の分量が満ち、憐れみの天使が二度と戻ることなく飛び去ろうとしている』ことを示す『わたしたちへのしるし』である。そのしるしは、預言者ダニエルが語った『荒らす憎むべきもの』をイエスが指し示して与えた警告によって、前もって型で示されていた。そこで、『主よ、聖にして真実なお方よ、地に住む者たちに対して、いつまで裁きを行い、わたしたちの血の復讐をなさないのですか』と求めた第五の封印の殉教者たちの祈りが成就する。また、その道しるべにおいて、愚かなおとめたちと賢いおとめたちが自らの品性を現す。」

日曜法において、アメリカ合衆国は「自国憲法のあらゆる原則を反故にする」。この働きが行われた期間は、2001年の愛国者法から始まった。2001年から日曜法に至るまでの時期は、憲法を反故にしていく漸進的な働きを表している。その漸進的な働きは、獣の像の形成が成し遂げられる預言のラインに対応している。獣の像のラインはやや複雑に見えるかもしれないが、その複雑さは理解する価値がある。獣の像のラインを複雑にしているのは、それが二つのラインを表しているからである。

地の獣に関しては、その二つの線に当たるものは共和主義とプロテスタント主義の角である。これら二つの角はやがて政教一致の関係へと結びつき、そのことによって獣の像の形成が成就する。したがって、獣の像の形成という一本の線の中には二つの線が内包されている。というのも、共和主義とプロテスタント主義という角は歴史を通じて互いに並行して進むが、それぞれの線にもまた、それ自体の預言的証しを担うべきものがあるからである。二つの並行する主題を含む一つの預言の線は、単に、憲法に関わる「語り」を表す政治的行為の道標を記していくことよりも、さらに複雑である。

共和主義の角とプロテスタントの角という二つの流れは、次の預言的事実によってさらに複雑になる。すなわち、共和主義の角の内部には奴隷制擁護の民主党と奴隷制反対の共和党との闘争の歴史があり、さらにプロテスタントの角の内部には、プロテスタントの角の歴史の中で賢い乙女と愚かな乙女のたとえに沿った絶えざるふり分けの過程が存在する、ということである。それでも、これらの真理にしっかりと立脚することはきわめて重要である。

地の獣の二本の角に象徴される筋の中には、キリストの品性を形づくるか、サタンの品性を形づくるかという、並行した描写がある。これは、キリストの像を形づくるか、獣の像を形づくるかに等しい。というのも、この文脈での「獣」は、創造主に対置される被造物を表しているからである。これらの特質の形成は、すべての人の内面においてなされる。恩恵期間が閉じられるとき、存在するのは二つの階級しかないからである。また、その形成は、教皇権と国際連合の同盟という外的側面においても行われる。

つまり、獣の像の形成に関する試練の時は2001年に始まり、アメリカ合衆国における日曜法の時点で終わる。その期間、地の獣の二本の角に関する予言的歴史は、宗教的であれ政治的であれ、それぞれの角の内外における論争と、さらに角同士のあいだの闘争を示している。

アメリカにおける日曜法は、イエスが「荒廃をもたらす憎むべきもの」として示された、避難すべきとの警告を表している。アメリカにおける日曜法は、2001年に始まった期間の終わりを意味する。愛国者法は「ダニエルによって語られた荒廃をもたらす憎むべきもの」であり、来たる滅びから逃れるためのしるしとしてイエスによって示された。

愛国者法は、1888年の予言的な光とブレア法案を含んでいる。したがって、愛国者法には予言的に日曜法の予型も含まれているため、2001年からの時期は、1888年のブレア法案と2001年の愛国者法によって型示されるように、日曜法によって始まり、そして日曜法で終わる。

2001年に都市から逃れるようにとの警告は、日曜法の時にバビロンから逃れるようにとの警告を象徴している。日曜法のとときにアメリカ合衆国にもたらされる裁きは、ミカエルが立ち上がり人類の猶予期間が閉じられるとき、全世界にもたらされる裁きを象徴している。アルファでありオメガであるキリストのしるしは、1888年のブレア法案によって表された真理と、1888年が表すすべての事柄のうちに繰り返し示されており、それらは2001年に再現している。

1888年を型としている2001年は、荒らす憎むべきものによって示される逃げるべきしるしを表すだけでなく、西暦66年のケスティウスによる包囲戦によっても表されている。西暦70年のティトゥスによる包囲戦は、アメリカ合衆国における日曜法を表している。アメリカ合衆国における日曜法は、西暦321年とコンスタンティヌスの最初の日曜法によって表されており、538年は、地上の最後の国家が獣の印に屈する時を表している。

2001年は1888年、ケスティウス、西暦66年である。日曜令はティトゥスと西暦70年および321年である。2001年はまた、イエスの洗礼であり、1840年8月11日の黙示録第10章における彼の降臨でもある。これらすべての象徴は、憲法のラインに寄与している。

アメリカ合衆国の予言的歴史はアドベンチズムの歴史と並行している。1798年、教皇権は致命的な傷を受け、また1798年は黙示録14章の第一と第二の天使の歴史に関わるダニエル書の予言の一部の封印が解かれた終わりの時であった。1798年に、アドベンチズムの予言的な始まりが示され、さらに同年、小羊のような角を持つ地の獣が、聖書の予言における第六の王国となった。

1798年に先立って、地の獣の系統に関連し、ひいてはアメリカ合衆国の発言とアメリカ合衆国憲法に関わる三つの予言的な道標があった。これら三つの道標とは、1776年に発せられた独立宣言、続いて1789年の合衆国憲法、そして1798年の外国人・治安法である。

それらの三つの道標は、憲法に関する予言の系譜に関わるものであり、聖書の予言における第六の王国の始まりを示している。日曜法は聖書の予言における第六の王国の支配の終わりであり、したがって、始まりに先立った三つの道標が型として示しているように、終わりに先立つ三つの道標が予言的必然として存在しなければならない。

2001年、塔の崩壊のときに成立した愛国者法は、1888年のブレア法案と、ミネアポリス総会におけるアドベンチストの指導部の明白な反逆によって予表されている。天使がホワイト姉妹に、モーセに対するコラ、ダタン、アビラムの反逆によって予表されていると告げたその反逆は、また、紀元27年のキリストの洗礼、1840年8月11日のイスラムの抑制、1776年の独立宣言、さらに、迫り来る怒りから逃れるためのしるしとして預言者ダニエルが語った「荒らす憎むべきもの」（ケスティウスと紀元66年によって表される）によっても予表されている。

もし、私たちが今考察している預言の系統がアメリカ合衆国憲法の系統であることを覚えているなら、前述のすべての預言の系統は、その憲法の系統によって表される預言的主題に寄与し、それを確立していることがわかる。とはいえ、最も相互に結びついているように見える系統は、獣の像の形成に関する系統である。獣の像とは、教皇権の獣の像であり、獣の上に座してそれを支配する女を伴う獣として表されるが、これは教会がその関係を主導する形での政教一致を意味する。アメリカ合衆国が獣の像を形成するためには、背教的プロテスタンティズムが政府をそこまで支配し、政府が宗教的な法令、そして最終的には日曜令を制定し施行するに至らなければならない。

獣の像を形成する過程が成就していくにつれて、トーマス・ジェファソンが「政教分離」と書き記した最重要原則に基づいて起草された憲法は、覆されることになる。プロテスタントの角が、宗教的な義務を強制するよう共和主義の角を指揮する力を持つとき、憲法の核心そのものが引き裂かれる。こうして、憲法の線と獣の像の線とのあいだに予言的な関係が成立する。

獣の像が形成される時期は、2001年の愛国者法によって始まり、獣の刻印が強制される日曜法のときに終わる。その期間には後の雨が注がれる。なぜなら、黙示録18章の力ある御使いが降り、その栄光をもって地を照らすとき、後の雨が降り始めるからである。ホワイト夫人によれば、それはニューヨーク市の巨大な建物が主のひと触れによって倒されるときに起こるといふ。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

後の雨が降り始める期間は、アドベンチズムの最後の世代の麦と毒麦がふるいにかかけられ、清められている時期を表している。そのふるい分けと清めは日曜法で終わり、日曜法の危機が到来したときに油を持っている賢い乙女たちは封印され、その後はミカエルが立ち上がり人類への猶予期間が終わるまで、聖霊が限りなく注がれる。

アメリカ合衆国で獣の像が形成されている間は、後の雨は降り始め、世界で獣の像が形成されている間は、後の雨は際限なく注ぎ出される。

2001年、ラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会の試練が始まったが、それは1840年8月11日のプロテスタントと、キリストがバプテスマを受けたときの古代イスラエルによって象徴されている。

「試練の時はまさに私たちの目前に迫っている。というのも、罪を赦す贖い主であるキリストの義の啓示において、第三の天使の大いなる叫びはすでに始まっているから

である。これは、その栄光が全地を満たす天使の光の始まりである。」『Selected Messages』第1巻、362頁。

かつての契約の民に対する最後の試練の過程は、黙示録18章の天使の光がそのメッセージを告げ始めるときに始まる。そのメッセージは黙示録18章の最初の三節にも表されており、ホワイト姉妹によれば、その三節はニューヨーク市の巨大な建物が倒壊したときに成就した。

こうして、ヨハネの黙示録10章に描かれているように、試しの過程が始まった。その試しとは、天使の手にあった小さな巻物を取り、それを食べるかどうかであった。この試しの期間中、後の雨は、小さな巻物を取って食べることを選ぶ者たちの上にもみ降っている。

多くの人は、初雨を大いに受け損なっている。彼らは、このようにして神が彼らのために備えられた恵みを、余すところなく受けてはいない。足りない分は後の雨が満たしてくれると期待している。最も豊かな恵みが授けられるときに、それを受けるために心を開くつもりでいる。これは恐るべき誤りである。神がその光と知識を与えて人の心に始められた業は、絶えず前進し続けなければならない。一人ひとりが自分の必要を悟らなければならない。心はあらゆる汚れを取り除いて空にし、聖霊の内住のために清められなければならない。初代の弟子たちは、罪を告白して捨て、熱心に祈り、自らを神にささげることによって、五旬節の日に聖霊の注ぎを受ける備えをした。同じ業を、ただしよりいっそう大きな程度で、今なさなければならない。そのとき人は祝福を求め、自分に関する業を主が成就してくださるのを待つだけでよかった。業を始められたのは神であり、神はイエス・キリストにあって人を完全に、その業を完成してくださる。しかし、初雨に象徴される恵みをおろそかにしてはならない。与えられている光に従って生きている者だけが、さらに大いなる光を受ける。私たちが日々、生きたキリスト者の徳を実践することにおいて前進していなければ、後の雨における聖霊の現れを認めることはできない。それは私たちの周りの人々の心に降り注いでいるかもしれないが、私たちはそれを見分けることも受けることもできないであろう。『牧師たちへの証言』506、507頁。

2001年のメッセージを食べた人々は、その時期にふさわしいメッセージを受けていたが、彼らとそのメッセージを本当に神の印のために備えられた経験として内面化したかどうかを明らかにするために、試みに会うことになっていた。その時期には、麦と毒麦がお共にあるため、後の雨は霧雨のように注がれるものとして表されている。ゆえにホワイト夫人はこう言う。「それは私たちの周囲の心々に降っているかもしれないが、私たちはそれを識別も受け入れもしないであろう。」賢い者が愚かな者から分けられるとき、後の雨はそのとき量りなく注がれる。五旬祭のときと同様であり、五旬祭は日曜法を象徴している。

また、これらのたとえば、審判の後には猶予期間がないことを教えている。福音の働きが完結すると、直ちに善と悪が分けられ、両者の運命は永遠に定められる。『キリストの実物教訓』、123。

後の雨の滴りの時期と、それに続く後の雨が限りなく注がれる時期は、神の民に対する裁きが行われる二つの期間としても示されている。神の民に対する第一の裁きの期間は2001年9月11日に神の家から始まり、次いで日曜法の時に、アメリカ合衆国での日曜法にお

いて始まる第三天使の大いなる叫びに応答するか、またはそれを拒む神のほかの羊の群れに対する裁きが成就し、第三天使の大いなる叫びはミカエルが立ち上がり人類の恵みの時が閉じられる時に終わる。

後の雨の二つの期間は、神の家から始まり、その後神の他の群れへと移っていく裁きの二つの期間でもあり、また、獣の像の形成の二つの期間でもある。

それら二つの預言期間のうち最初の期間、すなわち神の教会とアメリカ合衆国に裁きが下される時期は、共和主義の角とプロテスタントの角がともに裁かれるまさに同じ歴史である。まさにラオデキヤ的アドベンチズムが主の口から吐き出されるその地点で、アメリカ合衆国はその猶予の杯を満たし、国家的破滅がその国にもたらされ、その後サタンが現れてその驚くべき業を始める。十四万四千人は印を受け、日曜法の時に旗印として高く掲げられる。

私たちは、「天の栄光と過去の迫害の再来が入り混じるとき、地上で生きている神の民の経験」がどのようなものを少しでも言い表すことは不可能だと知らされている。

サタンは勤勉な聖書の研究者である。彼は自分の時が短いことを知っており、この地上で主の御業に対抗して、あらゆる点でこれを妨げようとする。天の栄光と過去の迫害の繰り返しが混じり合うとき、地上に生きる神の民がどのような経験をするかを言い表すことは不可能である。彼らは神の御座から発する光の中を歩む。御使いたちを通して、天と地の間には絶え間ない交信があるだろう。そしてサタンは、悪の天使たちに囲まれ、自ら神であると主張して、あらゆる種類の奇跡を行い、もしできるなら選ばれた者たちさえも欺こうとする。神の民は奇跡を行うことの中に安全を見いだすことはない。なぜなら、行われる奇跡をサタンが偽って模倣するからである。試みられ試された神の民は、出エジプト記31:12-18に語られているしるしのうちに自らの力を見いだすであろう。彼らは生ける御言葉、すなわち「書いてある」との言葉の上に立たなければならない。これこそ、彼らが確かに立つことのできる唯一の土台である。神との契約を破った者たちは、その日には神なき者、望みなき者となる。『証言』第9巻、16。

過去の迫害の繰り返しは、アメリカ合衆国で日曜法が制定されるときに始まる。というのも、その時にサタンが驚くべき働きを開始し、すでに「試され、練られた」賢いおとめたちは、そのとき「神の御座から発する光のうちを歩む」からである。これは天使たちの働きを通して実現する。なぜなら、「天使たちを手段として天と地の間に絶えず交わりが保たれる」からである。

全地の主のそばに立つ受膏者たちは、かつてサタンに与えられていた守りのケルブとしての地位を持っている。御座を取り巻く聖なる存在たちを通して、主は地に住む者たちと絶えず交信を保っておられる。黄金の油は、神が信者のともしびを満たし続け、揺らいで消え去ることのないようにされる、その恵みを表している。もし神の御霊の告げることばにおいてこの聖なる油が天から注がれなければ、悪の諸勢力が人を完全に支配してしまうだろう。

私たちが神から送られるみ告げを受け取らないとき、神は辱められる。こうして、暗闇の中にいる者たちに伝えられるために、神が私たちの魂に注ぎ込もうとしておられ

る黄金の油を、私たちは拒んでしまう。「見よ、花婿が来る。出て行って彼を迎えよ」という呼びかけが来るとき、聖なる油を受け取らず、心にキリストの恵みを大切にしておかなかった者たちは、愚かな乙女たちのように、自分たちが主をお迎えする備えができていないことに気づくであろう。彼らには、その油を得る力が自分自身の内になので、彼らの人生は難破してしまう。しかし、もし神の聖霊を求め、モーセがそうしたように「あなたの栄光を私に見せてください」と嘆願するなら、神の愛は私たちの心に豊かに注がれる。黄金の管を通して、黄金の油が私たちに注がれるであろう。「権勢によらず、力によらず、ただわが霊によって」と万軍の主は言われる。義の太陽の輝く光線を受けて、神の子どもたちは世にあって光として輝く。Review and Herald, 1897年7月20日。

賢い者たちは、ヨハネの黙示録第七章とエゼキエル書第九章で印を受けた者であり、また、「彼が送る知らせ」を拒むことによって主を辱める愚かな者たちと対比される。愚かな者たちは、「神との契約を破り、その日には神も希望もない者」である。その二つの部類は、時のメッセージを受け入れるか拒むかによって試され、彼らの品性を現す段階にまで導かれた。2001年9月11日以来、時のメッセージは後の雨のメッセージとなっている。

後の雨のメッセージは、イザヤ書二十八章に示されている「行に行を重ねる」という方法論によって見分けられる。「行に行を」の方法論は聖書研究において神が定められた方法であり、ゆえにその方法論を退けることは、「行に行を」（ここに少し、あそこに少し）を適用して表されるメッセージを退けるだけでなく、その方法論をお与えになった方ご自身をも退けることになる。

十四万四千人の封印へと至る試練の過程の中で靈感によって明らかにされた諸条件ゆえに、「天の栄光と過去の迫害の繰り返しが交錯する」歴史のただ中を神の子が進み抜ける唯一の道は、神の御座からの光を認識できる経験のうちにいることだ、ということが明らかである。その光は認識されなければならない。さもなければ無益であり、私たちは道を失う。

「私たちは後の雨を待つてはなりません。後の雨は、私たちの上に降る恵みの露と雨を認め、受け入れるすべての者の上に、今まさに注がれようとしているのです。私たちが光のかけらを拾い集め、私たちが神に信頼することを喜ばれる神の確かな慈しみを大切にすれば、すべての約束は成就します。[イザヤ書61章11節引用。] 全地は神の栄光で満たされるのです。」セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、984ページ。

2001年9月11日に始まり、黙示録18章の天使がその栄光で全地を満たし始めた時代において、後の雨は、私たちの上に降り注いでいる恵みの露と雨を認識し、それを自分のものとして受け取った人々の上にのみ臨んできた。先にホワイト姉妹が指摘した「大いなる誤り」とは、愚かな乙女たちが、後の雨が無制限に注がれるまで待てば、そのときに挽回できると考えたことである。そうではない。神の預言の言葉の理解において成長している者だけが、さらに多くの光を受ける。

本稿を締めくくるにあたり、私が指摘しておきたいのは、私たちが今置かれている試練の時の目的に関わる点である。過去の迫害が繰り返される時代に「神の御座から発する光

のうちを歩む」ためには、危機に先立って預言の言葉を身につけておく必要がある。

第1章では、ダニエルと三人の若者は、ネブカドネザルに試されるために出頭する前に、すでに教育を完成させていた。弟子たちが一致を完成させた十日間に先立って、キリストは四十日のあいだ、彼らに預言の言葉を解き明かした。そして、日曜法の型である五旬祭が到来した。

ダニエル書三章で、シャデラク、メシャク、アベデネゴは、猶予は必要ないとネブカドネザルに告げた。彼らは、日曜法の試練の時に自分たちが何をすべきかを、すでに心に定めていたからである。彼らがキリストとともに炉の中を歩いたとき、その忠実さはいっそう明らかになり、そして、試練の前からすでに心にしっかりと定着させていたそのメッセージは、炉の中の奇跡を目撃した来訪していた諸高官たちによって、当時知られていた全世界に伝えられた。

これらの考察は次回の記事で続けます。